

なな山だより

なな山緑地の会会報 第8号 2007・7

倉沢里山を愛する会との交流会



4月21日(土)「倉沢里山を愛する会」との交流会が行われました。なな山の出席者は、高木、青木(弘)、鎌田、長尾、中原、吉住の6名です。11時に倉沢のメンバー45名がなな山に到着。高木会長のなな山緑地全体についての説明(写真=左)に続き、2班に分れそれぞれ高木会長、中原さんの案内で約1時間なな山緑地の見学を行いました。キンラン、タマノカンアオイ、エビネ、サイハイランの花などを観賞しながら新緑のなな山をひと回りしました。

12時になな山を出発、徒歩で倉沢に向かいました。倉沢では昼食にトロロご飯と野草の天ぷらを倉沢のメンバーと一緒に頂きました(写真=右)。その後、倉沢の説明を聞き、倉沢の植物を見学しました。少し離れているだけなのに、なな山にはないものがあり、また、倉沢になくてなな山にはある植物もありました。またこの辺りは古墳跡があり縄文土器の欠片なども見つかり興味深い見学となりました。近所の里山どうしてこれからも交流を続けていきたいものです。



グリーンボランティア講座開催される



4月28日(土)なな山で森木会のグリーンボランティア講座が開催されました。参加者は受講生21名(なな山の長尾さんも受講生です)、講師は森木会の川添会長、多摩市から奥住、荻野氏、なな山の出席者は高木、相田、宇野、鎌田、須田、住崎です。

9時半から、全員での準備体操に続いて、相田さんの司会で高木会長からなな山のこれまでの歩み、現状など、住崎さんからなな山を市に寄付した経緯、里山と農家の関わりの歴史など、奥住さんから多摩市のみどり行政の現状などの説明があり、川添会長からマント群落など樹林の成り立ちと管理方法の講義がありました(写真=左)。その後相田さんの案内でキンラン、エビネなどの花や草木など、なな山

の自然観察を行いました。午後は手鎌によるアズマネザサの刈り取り実習と刈払機の使い方の講習が行われ、受講生が班に分かれ、なな山のメンバーなどの指導で各自が刈払機の操作実習をしました。



訃報 当会会員 白石 功 さん 逝去

白石 功さんはいつも人一倍お元気でわれわれの活動の推進役でしたが、ご病気のため去る5月23日逝去されました。

いつもジョークを言って周囲を笑わせていた在りし日のお姿がしみじみと偲ばれます。まだこれから一層のご活躍が期待されていたことを思うと誠に残念でなりません。

謹んで、ご冥福をお祈り申し上げます。

(写真=なな山で作業中の白石さん)



人の暮らしと樹木

夏のなな山

人が地球に生まれて以来、人の暮らしには樹木は欠かせない物となり今に引き継がれてきています。そのため、私たちの暮らしの中には数えきれないほどの事象を木に由来しています。その中から、この緑地に関わりのあるものをいくつか取り上げてみたいと思います。

まず代表されるのがスギです。古代の文献からタブノキとともに船材としてつかわれているのをはじめ、建築材料として最良の品質としての評価を受けています。木目、木肌の美しさ、感触のやさしさ、加工のしやすさは群を抜いています。家具や建具に広範囲に使われていますが、近年、戦後の事情でヒノキとともに拡大造林政策で里山から奥山まで一斉に植えられ、しかも大気と人体の複合的な要素が加わってスギ花粉が悪者扱いされ、その評判を落としているのは惜しまれます。

次にヒノキです。材の強さ、美しさ、香りのよさでスギ以上に高く評価されています。この緑地に多く植えられたのは、前の地主さんが柱材として府中大国魂神社に寄進しようとしたものと聞いています。総檜造りの社殿や仏閣がその繁栄を象徴したように、檜造りの住宅をもつことは人々のステータスとなっていました。家具や調度品にもいろいろ利用され、特に檜風呂などに憧れを抱く人も多いようです。

ケヤキもあります。大きく枝を立ち上げ、大径木に育つため、大きな柱や梁材に使われます。江戸時代には橋桁や船材に多く使われ、幕府がその植栽を奨励したため、東京周辺には多く見られると言われています。木目が美しく、硬さがあり、加工性にも優れ、鉢、椀、盆の調度品から大型の家具まであらゆる木工品に使われています。クヌギ、コナラは以前に触れたように、薪、炭、ホダギに使い、ホウノキはその大きい葉を利用して食物を盛ったり、酒の杯にした慣わしが今に残るところもあるようです。木彫の素材としても良く使われます。

ヤマグワは養蚕には必需品ですが、その心材の黒味は襖の引き手として加工され、そのたの小物にも珍重されています。

クロモジが高級楊枝として使われることは良く知られています。香と感触の良さで黒皮を付けて作るところから黒楊枝と呼ばれましたが、昔の女房は直接その名を口にしないで、言葉の一部を「もじ」に置き換えて「黒もじ」と使ったのが語源とか。「黒もじ」がそのまま木の名前になったのだそうです。

ヤマザクラは、皮は樺細工に、幹は家具や床材に、ウラゲエンコウカエデはイタヤカエデの仲間ですので床材、壁材に、アオダモが野球のバットに使われるのも良く知られたところです。

このような加工された木製品は、20年、30年、場合によっては100年、200年その状態を保つことが出来ます。これは大変重要な意味を持ちます。

今、地球環境の最大の問題である温暖化対策の鍵がここにあります。石油、石炭、天然ガスなどの化石燃料の出す二酸化炭素、これが温暖化の主要な原因といわれています。樹木は、成長期の光合成により多量の二酸化炭素を吸収して木質に変え固定しているのです。成長期を終わる頃この木を切り倒し、木材として利用すればかなり長期間二酸化炭素を固定して排出を抑制してくれます。切り倒した跡地には、若木を植え成長させるのです。自然の恵みをありがたく受けながら、樹木の育成と利用を繰り返し繰り返し進めることが、安定した地球環境の維持に繋がるのです。

同時に、木質バイオマスをエネルギー源とすることを可能な限り推進していくことも大変効果のあることです。カーボンニュートラルという言葉があります。木は燃焼して二酸化炭素を排出しますが、新しい木の生長がこれを吸収し、トータルとして二酸化炭素量は変わらず安定するという考え方です。

「なな山緑地」の樹木たちよ。君たちもその一翼を担っているのだ。

(完)

タマノカンアオイ *Asarum tamaense* Makino ウマノスズクサ科



4月上旬、東の谷でタマノカンアオイの花(写真=左)が咲いた。タマノカンアオイは多摩丘陵とその周辺に自生し、多摩市の稀少植物に指定されている。厚手の葉は常緑。暗紫色の花は、美しさ、愛らしさというよりも、八虫類を連想させるような様相だ。昨年、種子を撒き散らしたらしく、葉の下には、多数の若い葉が育っている。どのように成長するのか、今後の観察が楽しみだ。(写真=右、タマノカンアオイの幼葉、)タマノカンアオイの学名の後を見ると Makino とあり、牧野富太郎が命名したものであることがわかる。この学名は二名法という属名=*Asarum* と種小名=

tamaense によって構成されるもので、その後に命名者の名前を付すことになっている。属名と種小名はラテン語を用いイタリックで表記され、世界共通の植物名となっている。この命名法はスウェーデンの医師であり植物学者であるカール・フォン・リンネ(1707-78)(写真=左下植物採取姿のリンネ)が、植物を観察、体系化し、二名法と呼ぶ方法でそれらを整理したことによる。



植物の研究は、初めは国ごとに行われていたが、18世紀後半になるとヨーロッパにはアフリカ、アメリカ、オーストラリアなどから大量の植物が持ち込まれるようになり、同一植物がさまざまな名称で呼ばれていた。

この弊害を解消するべく、二名法が採用された。二名法はリンネの『植物の種』の第1版(1753)に基づき、属名と種小名で植物の名前を構成する。この方法は未知のものも含めた野生植物および栽培植物にあてはめることができ、すべての植物の知識をすべての人が共有することを可能とすることができた。さらに植物学史



上最初の分類体系であった。第3回国際植物科学会議(ウィーン 1905)で、リンネの『植物の種』の第1版(1753)を命名の出発点とすることが初めて確立され、それ以前の植物の正式名はすべて捨てられた。それにしても150年前の分類方法を採用するということは、日本であるならば明治初め頃のものに現在採用するということが、二名法がいかに普遍的な分類法であったかを物語ると同時に、二名法にシフトさせるためにいかに紆余曲折があったか、それに時間を要したかが推測できる。この命名法は現在、国際植物命名規約で規定され、国際植物科学会議において制定、改定されている。

リンネ生誕300年を迎えた今年、二名法は受け継がれているが、雄しべの数に基づいた性体系による分類法は進化論に代わり、またさらなる分類法も考えられ、電子化が進んでいる。植物界は科学の進歩によって常に揺れ動いている。自然は人間の都合に合わせてはくれないようだ。

広げよう会員の和

リレー随筆(8) 木漏れ日の中で

宇野晶子



山や森や林に関心を持って行動するようになってもう20年近く経ちます。ハイキングでなく林や森の中の片付け、整備をすると視界が広がり、林床に光がさす様子は写真でよく見る「木漏れ日の中で」という題材にぴったりです。手入れされずに放置している林に、少し手を入れてあげるだけで潜在的に眠っていた植物が光を浴び、芽生え、花を咲かせます。そのさまは、新しい発見と喜びに繋がります。

子どもの頃球根や種を植えた覚えのある人は、土から芽が出る喜びを忙しさの中で忘れていたのでは…。そんな人たちがふと立ち寄って気負った気持ちや疲れた心を癒すことができる所になれば素敵だと思っています。ここ「なな山」の仲間が楽しむために、作業をしたいと集まっている面々ばかりです。

誰の強制もない中で、一日の作業を終えてからの充足感、何ものにも代えられないもの。きっと自分の心に癒しの場を与えているのですね。良かったら一度立ち止まって深呼吸しにきませんか？

さて、次回は...そうです！いつも穏やかな青木弘年さんをお願いします。よろしくお願いしますね。

2007・4・8(日)晴れ気温18

全員で植物観察。春ですね。山も植物もエネルギーに溢れる。参加者14人。
「作業」枝拾い、枝整理、枝下ろし、畑作り、スツール作り、伐倒、刈払い。
「観察」咲いていた花 = タマノカンアオイ、ヒゴスミレ(写真右)、マルバアオダモ、チゴユリ、ホウチャクソウ、エビネは沢山芽を出している。ヤブレガサも伸びてきた。立見さん、新会員として入会された。4月21日に「倉沢里山を愛する会」との交流会あり、その下見に倉沢から4名の方が見学に来られた。昼の休みに須田さんから、豆乳餅、戸谷からチョコの差し入れあり。



2007・4・22(日)晴れ気温22



キンランが沢山開花。耕耘機が大活躍(写真左)。参加者9人。
「作業」畑作業、耕耘、サトイモ植付け、落枝拾い、ソダ丸作り、道修理、ヒサカキ、イヌツゲ伐倒、植物養生。
「観察」見つけた植物 = ヤマウド、ハンショウヅル、見つけた鳥 = ガビチョウ
 新しい耕耘機を導入したので、畑作業が捗った。広場側の崖下のソダ置き場は、満杯になり、クリの木などに掛かっているので新たなソダ置き場を検討する必要がある。隣接の山側に設けるか。

2007・5・13(日)晴れ気温24

仲間が増えました。今日は若い力とインターナショナルな風が 参加者14人。
「作業」草刈り、くず掃き、道修理、切った枝の整理、畑の開墾、植物養生、常緑樹の伐採。風間さんが入会されました。農工大の学生さんが3人来てくれました。1人はドイツからの留学生さん(写真右)。彼らが東側に積んであった木や枝を全部片付けてくれました。若いパワーが大活躍の日でした。



2007・5・27(日)晴れ気温29



白石さんのご冥福を祈って黙祷しました。参加者12人。
「作業」倉庫整理と棚卸し、畑仕事、草刈り、倒木片付け、道修理、草刈り、植物養生。
「観察」ウグイスカグラが実をつけています(写真左)。サイハイランが見事な花をつけています。ヤブレガサもつぼみをつけています。
 倉庫の整理と棚卸しを1年ぶりにしました。だいぶ財産が増えましたがキチンと整理したら倉庫がすっきりしました。時々整理しましょう。

2007・6・10(日)曇りのち雨気温20

集まりはよかったけれど活動は雨で中止。参加者11人。
 全員で林内散策。ヤブレガサが開花。10時頃雨激しくなり解散。

2007・6・24(日)曇りのち雨気温23

ジャガイモ(きたあかり)収穫、午後は雨で中止。参加者10人。
「作業」畑作業、広場草刈り、カヤ刈り。ジャガイモは100個位収穫(写真右)。サトイモ、サツマイモ、カボチャ、それぞれ草取り、追肥、土寄せなどを施す。カヤは乾燥させた後カボチャの蔓の下に敷く。百草団地の人たち10数人が見学に来られた。午後雨激しく中止になる。



なな山だより	第8号	平成19年7月7日発行
発行		なな山緑地の会
発行責任者		高木直樹
住所		多摩市和田1394 13
ホームページ	http://www.geocities.jp/nanayamaryokuchi/	
編集委員	鎌田文雄・中原君代・戸谷恵麻	

編集後記
なな山緑地の会のホームページができました。(アドレスは左記)会員、特に若い方を募集することを目的に作ったものですが、出来れば、更に内容を充実させていきたいと思っています。HPに関するご意見・ご希望をお寄せ下さい。K